

〔新共同訳〕

1 イエスは、弟子たちにも次のように言われた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この男が主人の財産を無駄使いしていると、告げ口をする者があった。2 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない。』3 管理人は考えた。『どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。4 そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ。』5 そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んで、まず最初の人に、『わたしの主人にいくら借りがあるのか』と言った。6 『油百バトス』と言うと、管理人は言った。『これがあなたの証文だ。急いで、腰を掛けて、五十バトスと書き直しなさい。』7 また別の人には、『あなたがあなたの証文だ。八十コロスと書き直しなさい。』8 主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。9 そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。10 ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。11 だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。12 また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。13 どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

〔直訳〕

- 1 だが彼は話した 弟子たちに対しても
「ある人が いた 金持ちで ところの 持っていた 管理人を
そして この者は 告発された 彼へ 浪費しているとして 彼の財産を。
2 そして 呼んで 彼を 彼は言った 彼に、
『何か これは、 私は聞く あなたについて。
提出しなさい 決算書を あなたの管理の。
なぜなら あなたはできない もう 管理することが』。
3 だが言った 自分の中で 管理人は、
『何を 私は行うだろう、
というのは 私の主人が 取り去る 管理職を 私から。
掘るのは、 私には力がない、 物乞いするのは、 私は恥ずかしい。
4 私は知った 何を私が行うだろうか
ように 私が管理職からやめさせられるとき 彼らが迎え入れる 私を 彼らの家の中へ』。

- 5 そして そばに呼んで 自分の主人の負債者たちの一人一人を
彼は話した 初めの者に 『どれほど あなたは負債を持つ 私の主人に』
- 6 だが 彼は言った 『百バトス オリーブ油の』
だが 彼は言った 彼に、 『取りなさい あなたの 証書を、
そして 座って 早く、書きなさい 五十と』。
- 7 次に 他の者に 彼は言った、『だがあなたは どれほど 負債を持つ』
だが 彼は言った、『百コロス 小麦の』。
彼は言う 彼に、 『取りなさい あなたの 証書を、
そして 書きなさい 八十と』。
- 8 そして 誉めた 主人は その不正の管理人を
ことで 賢く 彼は行った。
というのは この世の子らは より賢く 光の子らよりも 自分の仲間に対して ある。
9 そして 私は あなたがたに 言う、
自分のために あなたがたは作りなさい 友を 不正の富から、
ように それが尽きるとき 彼らが迎え入れる あなたがたを 永遠の住まいの中へ。

- 10 忠実な者は 最小のものに 多くのものにもまた 忠実である、
そして 最小のものに 不正な者は 多くのものにもまた 不正である。
- 11 それで、 もし 不正な富に 忠実で あなたがたがないなら、
本当に価値のあるものを 誰が あなたがたに 任せるだろうか。
12 そして もし 他人に属するものに 忠実で あなたがたがないなら、
あなたがたのものを 誰が あなたがたに 与えるだろうか。
13 誰も 召し使いは できない 二人の 主人に 仕えることが。
なぜなら、あるいは 一人を 彼は憎むであろう、 そして 他を 彼は愛するだろう、
あるいは 一人に 彼は固着するであろう、 そして 他を 彼は疎んじるだろう。
あなたがたはできない 神に 仕えることが そして 富に。」

①不正な管理人のたとえ（1-9節）

①a 「だが彼は弟子たちに対しても話した」。15章では、「イエスが罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」ことで咳いているファリサイ人や律法学者に向けて、三つのたとえが語られた。そのファリサイ派の人々が居合わせる中で、イエスは「弟子たちに対しても」たとえを語り、富の用い方を教える。それを「金に執着するファリサイ派の人々」は聞いており（14節）、さらに19節以下では「金持ちとラザロ」の物語が続く。16章全体では、危険な富の活用法がテーマとなっている。

①b 「この者（管理人）は彼（金持ちの人）へと告発された 彼の財産を浪費しているとして」
「告発する」はディアパッロー（とがめる・責める・ある者を告訴する）。通常、告発者を明言せずに、敵意を含んだ中傷を意味する。「浪費する」という動詞は、15章13節の「いなくなつた

息子」にも用いられている(「下の息子は…:財産を無駄使いしてしまった」)。いなくなった息子は財産を「浪費して」命の危機に瀕したが、この管理人も「浪費」によってその職務を取り上げられる危機に直面している。いなくなった息子も管理人も、自分の破滅の危機を真剣に受け止め、必死に対処する。

③「あなたの管理の決算書を提出しなさい」。「決算書」は、財産や資産活用が目録のことであり、貸し付け金額や借入者リストも含まれていた。管理人は主人の財産の管理をすべて任されている。④「何を私が行うかを私は知った」。管理人は、肉体労働に耐える体力がないこと、物乞いは心理的に耐えられないことを自覚し、「何を行うだろう」と自問していたが、「何を行うか」を知る。「私は知った」は、思案のすえに「知るに至った」こと、あるいは、結論に到達した心の絶叫を表す。

⑤「私が管理職からやめさせられるとき、私を彼らが彼らの家の中へ迎え入れるように」。この句は、9節でも「それが尽きるとき、あなたがたを永遠の住まいの中へ彼らが迎え入れるように」と繰り返されており、このたとえの中心となっている。

⑥「証書」。この語グラムマタは「同意書・負債証書・証文」の意味で用いられた。当時、負債額に応じた利子が記載されてはいなくても、返済額にすでに利子などが含まれていた。それで、この場合、主人に対する実際の負債額は五十バトスで、あとの五十バトスは利子として、管理人の取り分も含まれていたとも考えられる。

⑦主人は不正な管理人が「賢く行った」ことで「誉めた」。「誉めた」と訳した動詞は「是認する」「推奨する」の意味でも用いられる。

⑧「光の子」はキリストの弟子を指した呼び名(1テサ五5、エフェ五8、ヨハ一二36)。「賢く行う」こと、すなわち、いま直面している緊迫した状況(神の国の到来が迫った終末的な緊迫状況)にあって、イエスの弟子らしく振る舞うことが求められている。

⑨「富」と意識した語は、アラム語の「マンモン」から派生したと言われているが、明確ではない。「人が頼ることのできるもの」という意味から、「お金」や「財産」を表すようになったと推測される。「不正の富」は「天の宝」に対して、「この世の富」というぐらいの意味で用いられている。ルカでは、この世の富を用いて友を作るとするのは、特に貧しい者への施しを指すと考えられている。「友」は神の名を遠回しに言い表す表現として、天使たちを指すという解釈もある。

⑩「それが尽きるとき、あなたがたを永遠の住まいの中へ彼らが迎え入れるように」。「それが尽きる」の主語はマンモン、あるいは生命とする見方もある。「彼ら」は「人々」の意味。この非人称の用法は、おそらく「あなたが迎え入れられる」という受動態の意味を表しており、間接的に「神」によって迎え入れられることを示している。「永遠の住まい」は終末思想の用語で、神の住む所を表す(使一五16、黙七15、二一3)。「住まい」は「幕屋」を意味する語。

②たとえの解釈

① 伝統的な解釈

⑦管理人は主人の財産を浪費し、負債の額をごまかして主人に損害を与え、自分の身を守ろうとしたのだから「不正」である。主人がこの不正な管理人を8節で誉めたのは、不正な行為に対してではなく、身の危機に機敏に対応した抜け目のない賢さである。

④この解釈によれば、たとえを適用して真理を明かす部分は8節後半である。終末が差し迫る今、光の子もこの世の子らに学んで、事態に機敏に対応する賢さを持たねばならないと教えており、9節は後から加えた解釈だとされる。

⑥新しい解釈

⑦管理人は負債額に上乘せされていた利息分を差し引いたのであり、不正どころか、利息を禁じた律法に立ち帰った。負債者は喜び、管理人は掟どおりに振る舞い、主人はその寛大さが賞賛の的となるなら、評判が上がるという益を得ることになる。不正をせずに、窮地を脱出する道を思いついた管理人を主人も誉めざるを得ない。

⑧この場合、「不正の管理人」と呼ばれるのは、主人の財産を浪費したから、あるいは律法に禁じられた利息を取っていたから、その両方であるかもしれない。また、ここでの「不正の」は文字通りに「正しくない」の意味ではなく、「この世的な」の意味であり、この世の世俗的生き方、物的利益を追求する生活態度を指しているとも考えられる。この世は不正にまみれており、その特徴は不正にあるから、「この世的な」という代わりに、「不正の」と表現される。

⑨ユダヤの律法は同胞から利子を取ることを禁じていたが、実際に貸した金額に利息分を上乘せした額を総額とする証書を作ることによって、利息分を隠蔽する方法が取られていたようである。職を取り上げられる危機に置かれた管理人は、証書を書き換えさせ、百バトスを五十バトスに、百コロスを八十コロスにしているが、この減額分が利息分だったとすれば、利息を禁じた律法に合うように書き改めたことになる。現代では、きわめて高い利息に思えるが、当時のオリエント社会では通用していた利息であり、利率が百パーセントであることも珍しいことではなかった。しかし、たとえ話であるので、誇張も含まれていると考えられる。

⑩この場合は、8節後半というより、9節がたとえの意味を明かす部分になる。4節後半「私が管理職からやめさせられるとき、私を彼らが彼らの家の中へ迎え入れるように」と、9節後半「それが尽きるとき、あなたがたを永遠の住まいの中へ彼らが迎え入れるように」は明らかに対応しているからである。この対応関係から見ると、友を作るために富を使い、迎え入れてくれる場所を確保すべきだということが、たとえが教える要点になる。

⑪管理人が機転をきかせて、「私を彼らの家の中へ迎え入れるように」と(4節)行動したように、弟子たちも富を使って友を作り、「あなたがたを永遠の住まいの中へ迎え入れるように」すべきだと教える。「不正の富」は不正によって蓄えた富というよりは、「この世の富」。「この世を生きるために与えられている富」のことである。それは蓄えられるべきものではなく、「友を作る」ため、つまり貧しい人に施すために使われるべきである。それが永遠の住まいに迎え入れられるために実行すべき「賢さ」であり、今、この世に生きるイエスの弟子たちに求められている機敏な対応である。

③二次的な適用(10―13節)

⑫この段落はたとえとの結びつきがはるかに弱くなった二次的な解釈だと思われる。10―12節では「忠実さ」が、13節では「仕える」がキーワードになっている。

⑬「最小のもの」であり、「不正な富」であり、「他人に属するもの」である「この世の富」に忠実

でなければ、「多くのもの」であり、「本当に価値のあるもの」であり、「あなたがたのもの」である天の富は与えられない。

◎旧約的な用法で、「憎む」は「強く退ける」の意味であり、「愛する」は「他の何ものよりも優先させる」を意味する。「固着するであろう」は「献身する」の意味。「一人を強く退け、何を何ものよりも優先するか、一人に献身し、他を疎んじるか」。同じ概念を繰り返す平行句によって、あれもこれも手にすることはできない、どちらか一つに仕えて、一枚の心にならなければならない、ということが強調されている。

④神は永遠にとどまる方であるのに対して、この世の富は過ぎ去る。「二人の主人に仕える」なら、引き裂かれてしまう。どちらに「仕える」か、選ばざるをえない。

④アモス 8章 4―7節

〔新共同訳〕

4 このことを聞け。

貧しい者を踏みつけ

苦しむ農民を押さえつける者たちよ。

5 お前たちは言う。「新月祭はいつ終わるのか、穀物を売りたいものだ。安息日はいつ終わるのか、麦を売り尽くしたいものだ。エファア升は小さくし、分銅は重くし、偽りの天秤を使ってごまかそう。6 弱い者を金で、貧しい者を靴一足の値で買い取ろう。また、くず麦を売ろう。」

7 主はヤコブの誇りにかけて誓われる。

「わたしは、彼らが行ったすべてのことをいつまでも忘れない。」

⑤アモスは紀元前 8 世紀中頃に活動した預言者。当時、北イスラエルはアッシリアが弱体化したことに乗じて、その領土を北や東に拡大させることができた。そのためかつてない繁栄を享受する人たちが現れたが、彼らはいっそう豊かになろうとして、利潤追求に血眼になったが、アモスは彼らのゆがみを批判した。4 節の「踏みつける」は、2 章 7 節でも、金持ちの態度を表す言葉として用いられている。「押さえつける」は動詞シャーヴアト（終わる）の使役形であり、「終わらせる・破壊する」の意味。

⑥5 節の「穀物を売りたいものだ」と 6 節の「売ろう」は同じ動詞である。直訳すれば、「穀物を買わせたいものだ」「くず麦を買わせるだろう」

となる。同じ動詞が最初と最後に置かれており、「買わせる」ことにしか目が向かわない商人たちの姿を象徴的に表している。

◎旧約聖書が述べる「安息日規定」のうちで最古と思われる規定は、出三四 21「あなたは六日の間働き、七日目には仕事をやめねばならない。耕作の時にも、収穫の時にも、仕事をやめねばならない」と言われる。この規定が強調するように、安息日の最大の特徴は「仕事をやめる」ことにある。しかし、アモスが批判する商人にとっては、安息日はあってほしくない、迷惑な一日である。彼らはむしろ一日も休まず仕事をして、儲けをいっそう増やしたいと思っている。七日目

も仕事をしたいと熱望するほどに商売熱心な彼らにとって、仕事は神と共に働く時間ではなくなり、むしろごまかして、利潤を追求するための場になっている。

④ エファ升を小さくし、分銅を大きくし、あらゆる手段を用いて、利潤を追求する。しだいに、分量をごまかすだけでは終わらず、「靴一足」ほどの微々たる債務を返せない者を奴隷として売り買いで儲けることも、商品を偽って「くず麦」を買わせることも平気になる。

⑤ 後の時代の人々は「仕事をしない」ことの意義を極めようとし、天地創造における神の休息（出20章）や、神の業としての出エジプト（申5章）を根拠として示している。いずれにせよ、七日目に仕事をしないのは、神が行った業を思い起して、残りの六日間を神と共に働くためである。六日間の労働を真の労働とするために、七日目に「仕事をしない」。それを怠れば、アモスの時代の商人たちのように、利益の誘惑に打ち勝てず、利益中心に生き始めることになる。

⑥ 主はヤコブの誇りにかけて、「わたしは、彼らが行ったすべてのことをいつまでも忘れない」と誓う。「誇り」と訳される語は「誇る」ことのできる栄え・威光」を表すが、悪い意味で「高慢さ」も意味する。アモスではヤコブは尊大さの象徴とされているので、ここでの「誇り」は一種の皮肉である。

⑤ 富の用い方

⑦ a アモスの時代、富に惑わされた商人たちは、安息日も休まずに仕事をしたいと考えた。彼らは自分たちは勤勉な人間だという「誇り」をもっていったのかもしれない。しかし、アモスはそれを「高慢」とし、必要以上に富を獲得することを戒める。彼らの労働は「貧しい者を踏みつけ、苦しむ農民を押さえつける」ことになるからである。「押さえつける」の直訳は「終わらせる」であり、「破壊する」の意味になる。一部の人間が富を独占するために働くことは、誰かの命を終わらせることにつながる。この恐ろしさに気づくようにとアモスは語る。労働は神と共にあるとき、真の労働となる。安息日に神の業を思い起こすことをないがしろにする者は、富の誘惑に陥り、自分の利益だけを求め、貧しい者と共に生きることが忘れていく。

⑧ b ルカもまた、この世の富を獲得することが、人を神から引き離す機会となる危険性を認めている。主人の財産を任された管理人は、主人の財産を自分のもののように浪費し、同胞から取ることを禁じられている利子を受け取っていた。しかし、管理人は職を取り上げられる危機に直面したとき、その富を放棄し、人々が自分を家に迎え入れることを選ぶ。

⑨ c この管理人のように、キリストを信じる者たちもこの世の富を用いて「友」を作り、「永遠の住まい」に迎え入れられるようにすべきである。「この世を生きるために与えられている富」は蓄えられるべきものではない。豊作に恵まれた金持ちが思案の末、倉を建て、穀物や財産をしまい、豊かさを自分だけのものにしようとしたが、神は彼を「愚かな者」とする（二二20）。門前に横たわるラザロを見過ごしにし、ぜいたくに遊び暮らした金持ちは、死後、陰府の炎に苦しむ（一六19以下）。ルカ福音書では、この世の富を持つ者に厳しい警告が語られているが、富の所有を禁じているのではなく、この世の富を貧しい者と共に生きるために用いるようにと教える。富は貧しい者と共に生きるために用いられなければならない、そのように用いられるとき、富は神との交わりを強くするためのものとなる。アモスが語るように、人は神の業を見つめることがなければ、自分の利益のためだけに生き、隣人と共に生きることができないからである。